



公益財団法人かながわ考古学財団 平成 26 年度考古学特別研究講座
— 報告書の成果から導き出されるもの② —



縄文中期の環状集落

— 相模川流域の縄文時代 —

事例報告1: 小川岳人「川尻遺跡(国指定史跡川尻石器時代遺跡)」

事例報告2: 天野賢一「川尻中村遺跡・原東遺跡」

ディスカッション: 小川岳人・天野賢一・(司会)阿部友寿

2014(平成 26)年9月 13 日(土) 9:45~12:00/14:00~16:10

神奈川県埋蔵文化財センター 研修室



地域の特性を活かした史跡等総合活用支援推進事業

ごあいさつ

公益財団法人かながわ考古学財団は、文化財保護法の趣旨が生かされるよう、神奈川県内の発掘調査を行うとともに、その調査成果を広く公開し県民の皆さまが活用できるようにすることにより、学術・文化の振興と地域文化の発展に寄与することを目的として活動しています。

この考古学特別研究講座では、これまで当財団が発掘調査を行った県内各地の遺跡について、その調査結果をまとめた発掘調査報告書の成果から導き出された地域の歴史像を研究し、提示いたします。新たな問題提起をすることにより、埋蔵文化財に対する興味・関心と理解をより深めていただくことを目的とするもので、昨年度の第1回に引き続き、二度目の開催となります。

いわば当財団の調査研究の集大成とも言うべき普及事業であり、前回好評であったことから、今回も同じ内容の報告を午前と午後に行うことで、より多くの参加者の方々にお集まりいただくことといたしました。

テーマとしては、相模川の恵みを受けた、肥沃で豊かな相模野の歴史の中で成立した、縄文時代の集落について取り上げることといたしました。古くから関心の高いテーマであり、今回の講座だけで到底語り尽くせるものではありませんが、皆さまのご高評を仰ぎながら、この考古学特別研究講座を更に深化させてまいりたいと思いますので、ご支援の程を宜しくお願いいたします。

最後になりましたが、当財団の事業に関して、日頃よりご指導、ご協力を賜っている関係諸機関・諸氏とご活用、ご支援をいただいている県民の皆さまに、お礼を申し上げます。

2014(平成26)年9月

公益財団法人かながわ考古学財団

理事長 村山正和

事例報告 1：川尻遺跡(国指定史跡川尻石器時代遺跡)

(公財)かながわ考古学財団 調査研究部

調査課 小川岳人

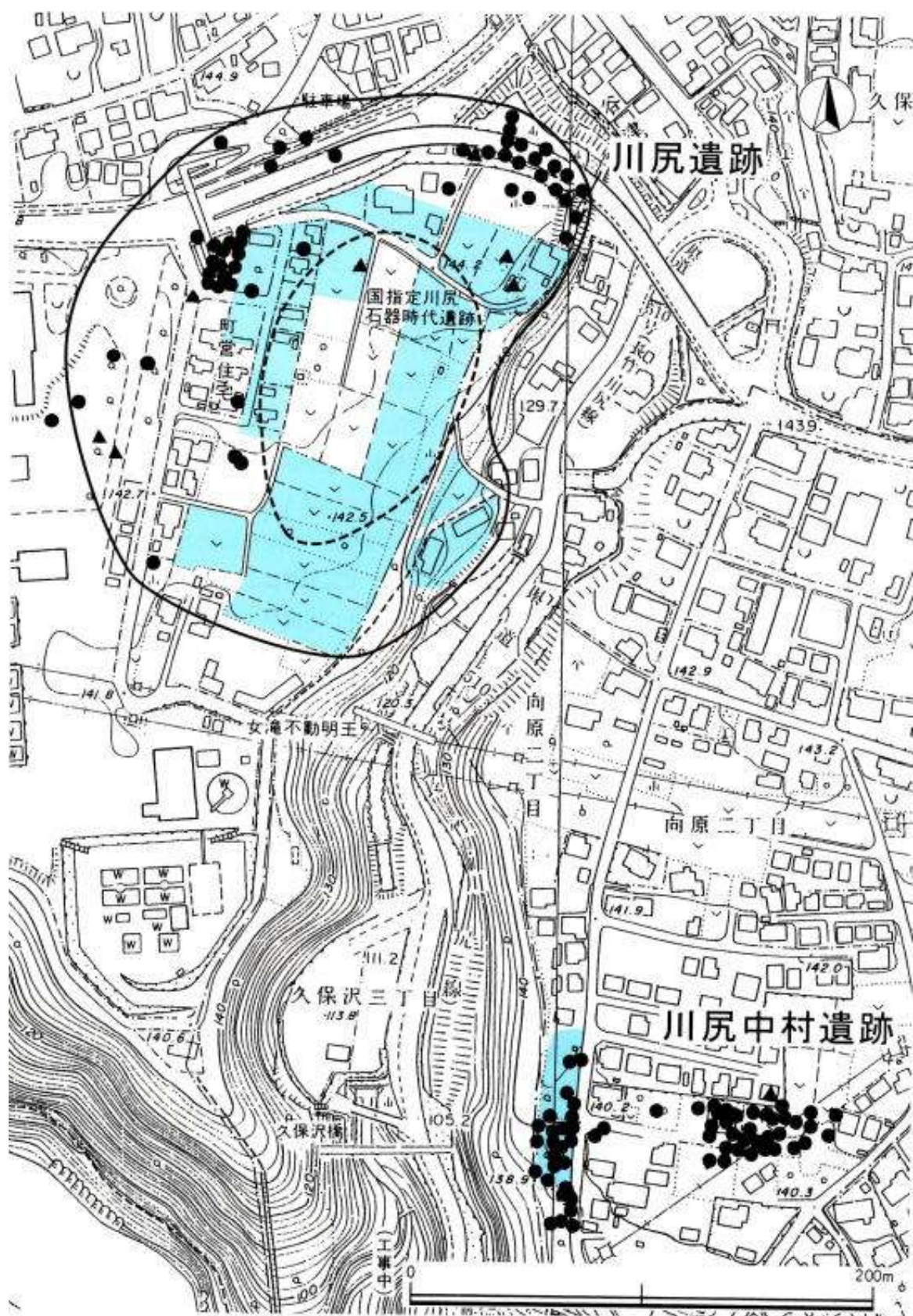
はじめに

富士山北麓を水源とし秩父山地と丹沢山地の間を東に流れる相模川は、山地と平野の変換点でその大きく流れを屈曲させて、相模湾に向かって南流する。現在の相模原市緑区谷ヶ原周辺に相当するここは、相模野台地扇頂部に位置し、また古来より相模川の河谷を通じて相模・甲斐また武蔵を取り結ぶ交通上の要地でもあった。本稿で述べる川尻遺跡はこの相模川の屈曲部に臨んだ段丘上に立地する。遺跡の東側を流れる谷津川が刻んだ深い谷を挟んで川尻中村遺跡、相模川を挟んだ対岸の段丘上に原東遺跡がそれぞれ立地し、ほぼ同時期に存在したと思われる3つの集落遺跡が川をはさんで位置している。

1. 川尻遺跡の調査

川尻遺跡は、土器や石器の散布によって古くから知られた遺跡で、石野瑛氏による大正11(1922)年の現地調査、続く昭和4～5(1929～1930)年にわたって実施された発掘調査の結果、縄文時代の敷石住居跡などが多数存在する重要な遺跡であることが判明し、昭和6(1931)年に国史跡「川尻石器時代遺跡」として指定された。

その後昭和32(1957)年に指定範囲隣接地点で石野瑛・野口義麿・磯崎正彦等による発掘調査、昭和47年には史跡整備を目指した三上次男・吉田章一郎・田村晃一による発掘調査が実施されている。平成元～2(1989～1990)年に遺跡北側を通る県道(川尻バイパス)建設に伴う神奈川県立埋蔵文化財センターの調査、平成9年には遺跡西側の谷ヶ原浄水場内を、かながわ考古学財団が調査し、同県立埋蔵文化財センターの調査では縄文時代中期の住居跡45軒、後期の敷石住居跡1軒が、かながわ考古学財団の調査では縄文時代中期～後期の敷石住居跡2軒をはじめ中期～後期の遺物包含層等を調査している。平成11(1999)年に遺跡の範囲確認を目的とした発掘調査が、かながわ考古学財団によって実施され、近年では平成19～21(2007～2009)年に史跡の実態解明を目的とした史跡指定範囲内の調査が相模原市教育委員会によって実施されたほか、平成21(2009)年にも谷ヶ原浄水場内の調査を、かながわ考古学財団が実施している。



第1図 川尻遺跡・川尻中村遺跡住居址分布図（山本 2000 を改変）

2. 発見された遺構と遺物

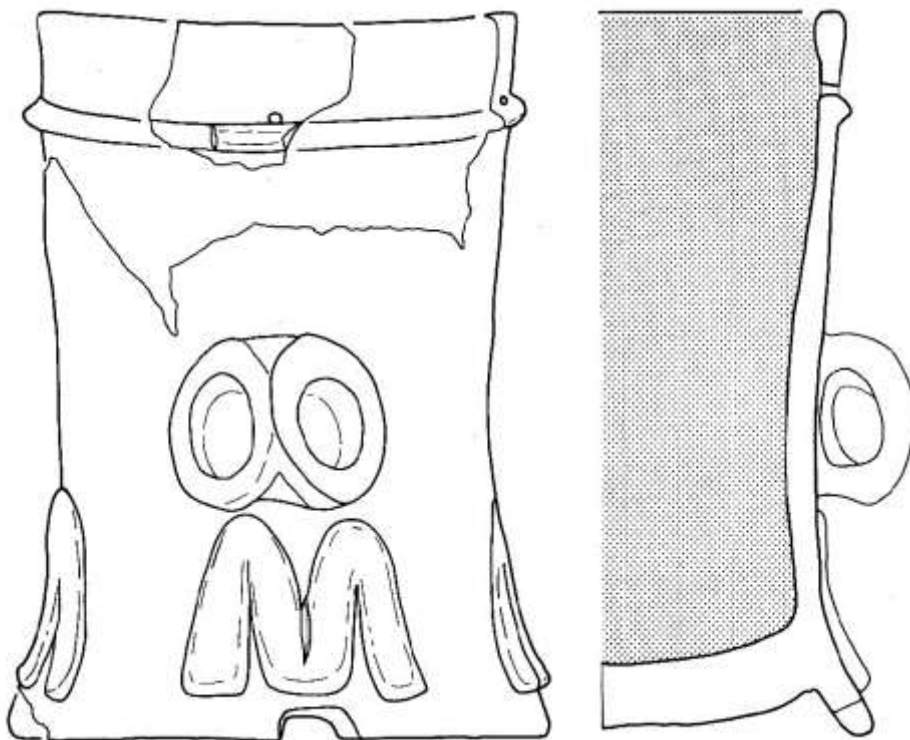
川尻遺跡は指定に先立つ調査において「指定せる民有地二重筆のうちに石敷の埋没を認められるところ約三十余箇所」敷石住居跡が「本遺跡の如く比較的狭い地域内に、多数に存在する如きは、また稀なるものに属する」とされ、敷石住居跡が群在する遺跡としての評価を与えられた。

その後の調査においても多数の敷石住居跡が発見され、当初の想定が正しかったことが認識された。一方で縄文時代中期の竪穴住居跡が多数発見され、調査の進展は本遺跡が、縄文時代中期の大規模な集落遺跡でもあることを明らかにした。縄文中期の集落と後期の集落が重複して形成されているのである。また後期の配石墓や配石遺構の存在から単に敷石住居跡が群在する集落という認識は、石を多用した遺構で構成された後期の集落という認識に上書きされたとしてよいだろう。

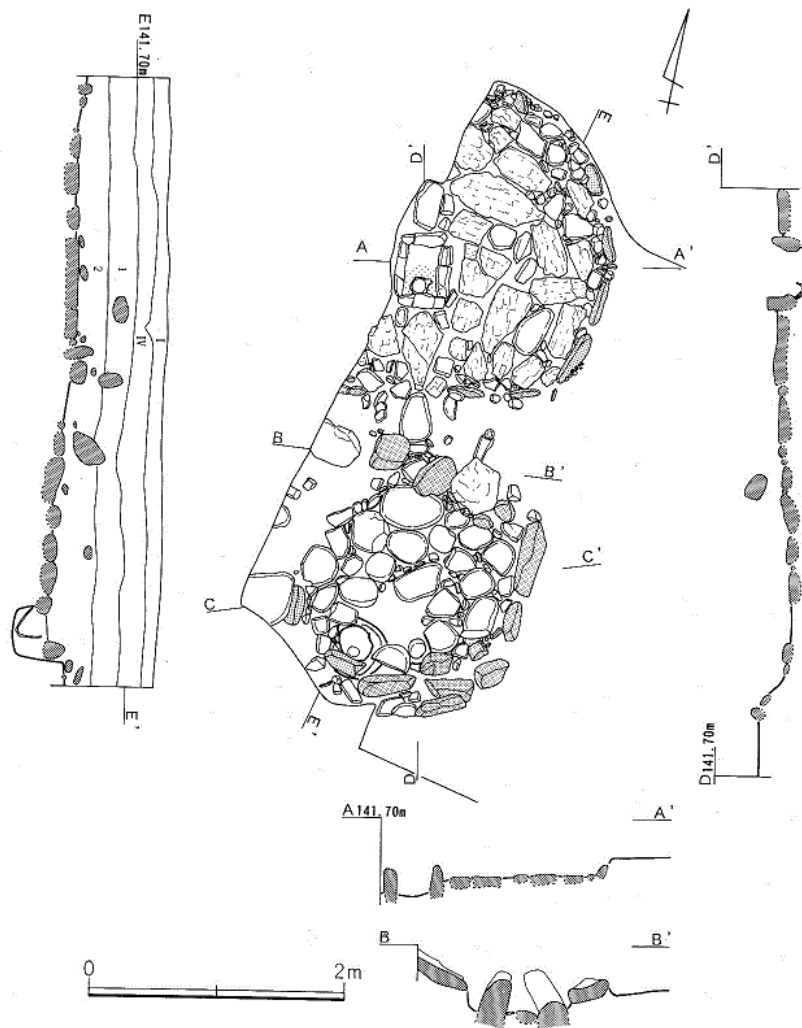
これらに加え近年の相模原市教育委員会による史跡指定範囲内の調査は後期後半～晩期の遺構、特に晩期に人為的に形成されたと思われる「窪地地形」の存在を明らかにした※。
※ここで言う「窪地地形」とは、下総台地や大宮台地などの中期・後～晩期集落に典型的に見られる環状集落中央に認められる窪地のことである。元来は窪地を取り囲んで集落が展開したものと思われるが、近年窪地に人為的な削平を加えたと認められる事例が増加している。削平した土を周囲に盛った「盛土遺構」が認められる場合もある。

3. 遺跡の広がりや想定される遺構分布

遺跡は前述の通り、相模川北岸の河岸段丘上に立地する。遺跡が所在する段丘は北側には丘陵がせまり、南側は相模川の崖線、東側は谷津川の谷(久保沢)で画されている。これまでの調査で確認された縄文時代の住居分布は、北は現在の川尻バイパス、北東から東にかけては谷津川の谷に接し、西側は谷ヶ原浄水場内に達すると考えられる。南側の範囲がやや不明ながら、南北約250m、東西約200mほどのややつぶれた卵形を呈する範囲が、集落遺跡の範囲であったと想定される(第1図)。なお、この範囲をそのまま広大な環状集落の範囲と想定することも可能だが、やや広すぎる印象も受ける。むしろ竪穴住居跡が濃密に分布する遺跡北東部と町営住宅北側を結んだ範囲直径約150mほどの範囲が適切であろう(近在の川尻中村遺跡の想定される径が約150m)。近年、相模原市教育委員会の調査で発見された縄文時代晩期の窪地が、この範囲のほぼ中央に位置することとなり、窪地が集落の中央広場に相当すると考えれば、中期集落の占地が後期～晩期にかけて踏襲された可能性を示唆するものである。



第2図 川尻遺跡出土の有孔罎付土器(中期勝坂式期) 高さ 20 cm (加藤他 2000 より)



第3図 川尻遺跡で発見された敷石住居跡（加藤他 2000 より）

4. 川尻遺跡の特徴

川尻遺跡の特徴としては、

- ・川尻遺跡・川尻中村遺跡・原東遺跡という規模の大きな集落遺跡が川を挟んで立地していること
- ・縄文時代中期の大規模な集落遺跡であり、縄文時代中期の集落と縄文時代後・晩期の集落が重畳して形成されていること
- ・(当初の史跡指定の理由ともなった)敷石住居跡や配石墓・配石など石を使った遺構で構成される縄文時代後期の集落遺跡であること
- ・縄文時代晩期にも集落が継続し、特に人為的な「窪地地形」が形成されていることが上げられる。

中期集落と後期以降の集落が重なって形成される事例には、神奈川県横浜市の神隠丸山遺跡、埼玉県さいたま市の馬場小室山遺跡、千葉県千葉市加曽利貝塚などがあり、東京湾岸から大宮台地・下総台地の規模の大きい遺跡に認められる。これらのうち神隠丸山遺跡と加曽利貝塚は中期集落と後期集落の占地在ならず双環状になる例。馬場小室山遺跡は中期集落と後期集落の占地在重なった例となる。

敷石住居跡や配石で構成される集落遺跡は関東山地沿いに認められる傾向である。神奈川県相模原市の畑久保遺跡、同県伊勢原市の下北原遺跡、秦野市曾谷吹上遺跡、山梨県大月市塩瀬下原遺跡や長野県茅野市聖石遺跡が典型例として上げられる。山梨県北杜市の金生遺跡は晩期の事例となる。一方「中央窪地」は前述の通り大宮台地から下総台地に認められるもので、川尻遺跡の事例は両者が重なっている珍しい事例と言える。

引用・参考文献

- 天野賢一他 2000『原東遺跡－県道 510 号新小倉端建設事業に伴う発掘調査報告－』かながわ考古学財団
- 石野 瑛 1931「相模国谷ヶ原石器時代住居址群」『史跡名勝天然記念物』第 6 巻 10 号
- 石野 瑛 1934「神奈川県下における石器時代住居址調査報告」『史跡名勝天然記念物調査報告書』第 2 輯
- 石野 瑛 1961『神奈川県大観』5 (湘西・湘北) 武相学園
- 石野 瑛 1963「神奈川県津久井郡谷ヶ原住居址群」『日本考古学年報』10 日本考古学協会
- 井関文明他 2010『川尻遺跡Ⅲ－相模原市大島～城山町谷ヶ原地内送水管敷設工事に伴う発掘調査－』かながわ考古学財団
- 大貫英明・井上洋一他 1992「谷ヶ原遺跡 (川尻遺跡)」『城山町史』1 資料編 (考古編) 城山町
- 荻野新三郎他 1935「神奈川県川尻石器時代遺跡」『史跡調査報告』第 7 輯
- 加藤勝仁他 2000『川尻遺跡Ⅱ－谷ヶ原浄水場内事業に伴う発掘調査－』かながわ考古学財団
- 中川真人 2008「相模原市国指定川尻石器時代遺跡－縄文時代後期後半の中央窪地型集落の形成－」『第 32 回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』神奈川県考古学会

三上次男他 1972『史跡川尻石器時代遺跡調査概報』神奈川県教育委員会

三上次男他 1988「史跡『川尻石器時代遺跡』の調査報告」『青山考古』第6号

三上次男他 1988「付編史跡川尻石器時代遺跡の調査報告」『城山町史』1 資料編（考古編）城山町

御堂島正他 1992『川尻遺跡－県道相模原津久井線川尻バイパス建設にともなう調査－』神奈川県埋蔵文化財センター

山本暉久他 2000『国指定史跡川尻石器時代遺跡範囲確認調査報告書』神奈川県教育委員会 城山町教育委員会かながわ考古学財団

吉村藤臣 1967「谷ヶ原石器時代遺跡」『築井文化』第5号 津久井郷土研究会

事例報告 2：川尻中村遺跡・原東遺跡

(公財)かながわ考古学財団 調査研究部

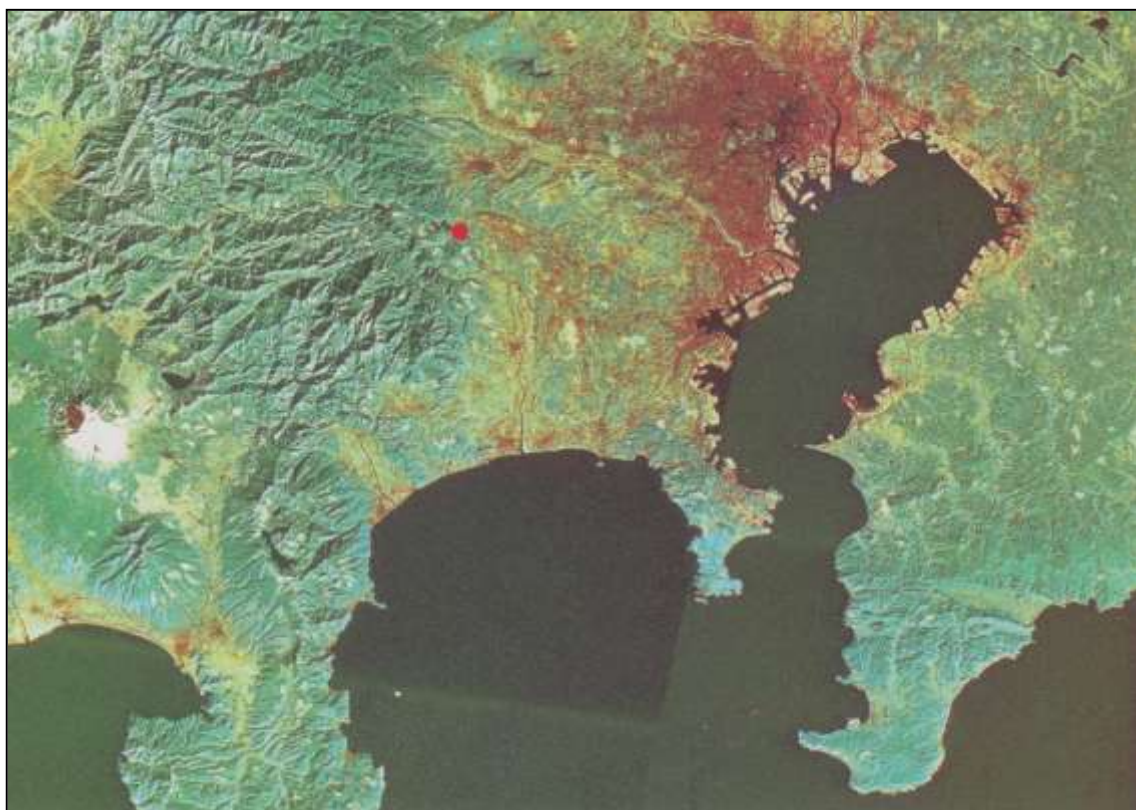
調査課 天野 賢一

1. はじめに

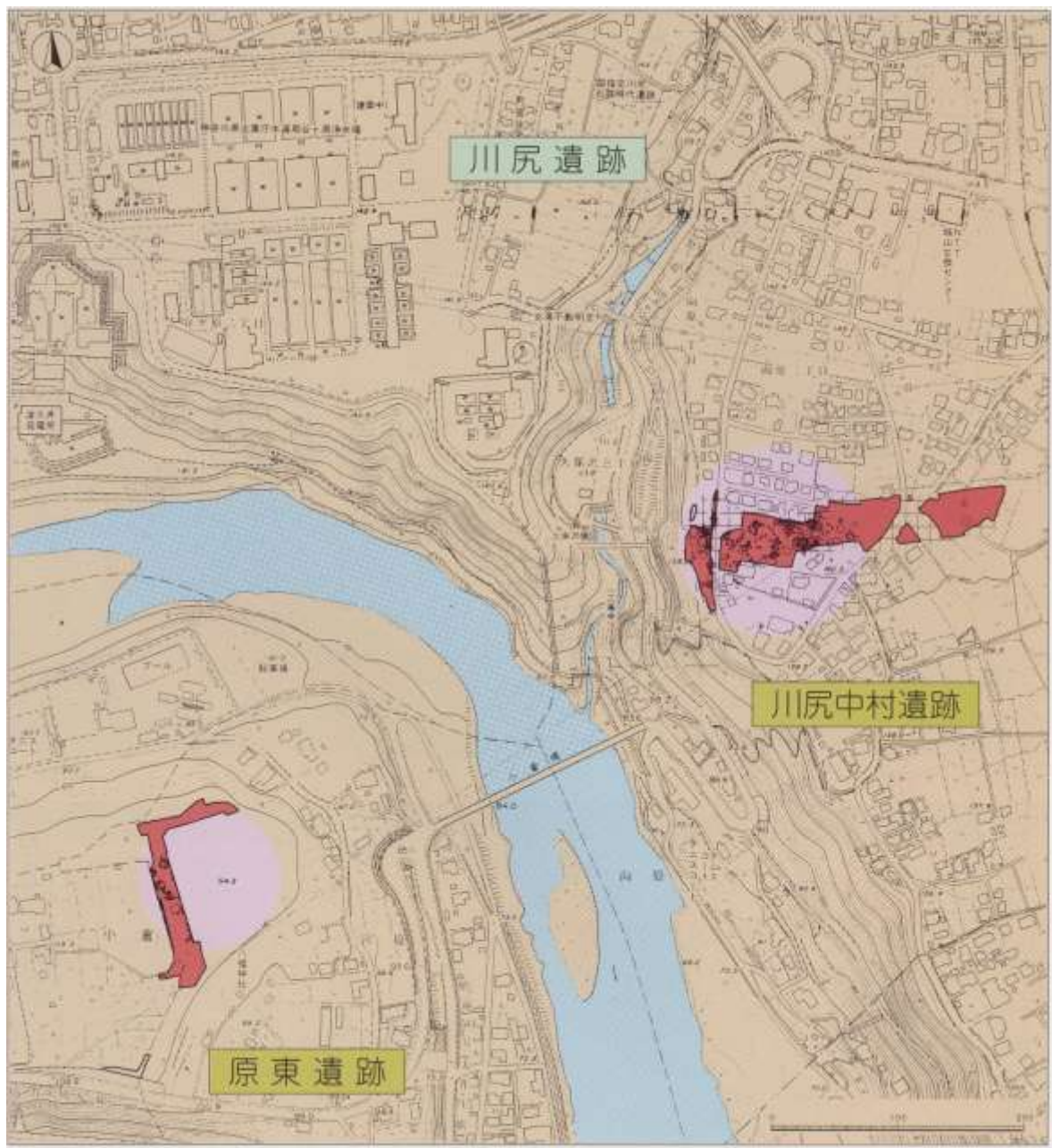
川尻中村遺跡・原東遺跡は、J R 橋本駅の西方 4 km に位置し、遺跡は相模川を挟んで対峙するよう形成されている。相模川は、富士山東麓の山中湖周辺に源流を有し、山間部を縫うよう北進・東進しながら本遺跡付近で南下して、河口の相模湾に至る全長 109km の河川である。両遺跡は、相模川河口から 34km さかのぼった位置にあたり、遺跡のあり方を考える上で相模川は重要な要素となるものである。神奈川県内でも相模川流域には、たくさんの縄文集落があるが、その中の川尻中村遺跡・原東遺跡の様相を見ていきたい。

2. 遺跡の特徴

二つの遺跡は、関東山地と関東平野の境界部にあたっている。川尻中村遺跡は、相模川左岸に面し、谷津川を隔てて北に位置する川尻遺跡と隣接している。原東遺跡は、北側と東側が相模川、南側が串川と三方向で河川に囲まれ、西側の背後には城山がそびえる半島状の地形を呈する台地上に形成されている。標高は、川尻中村遺跡が 140m、原東遺跡は 115m で、川尻中村遺跡から原東遺跡を見下ろす形で位置している。

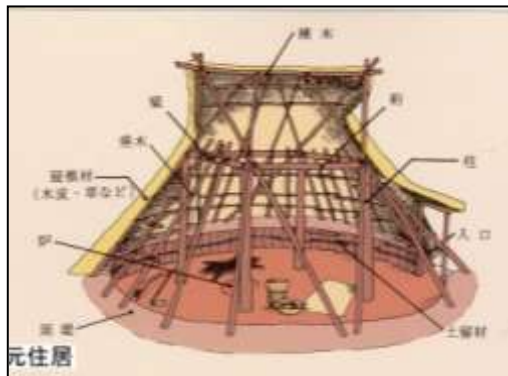


第 1 図 遺跡の位置(●印は、川尻中村遺跡・原東遺跡)衛星写真

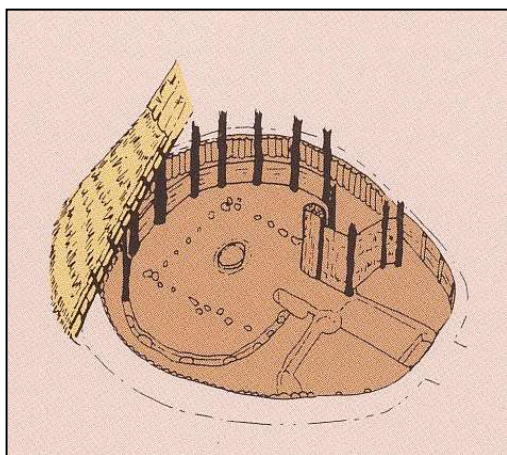


第2図 川尻中村遺跡・原東遺跡の位置図

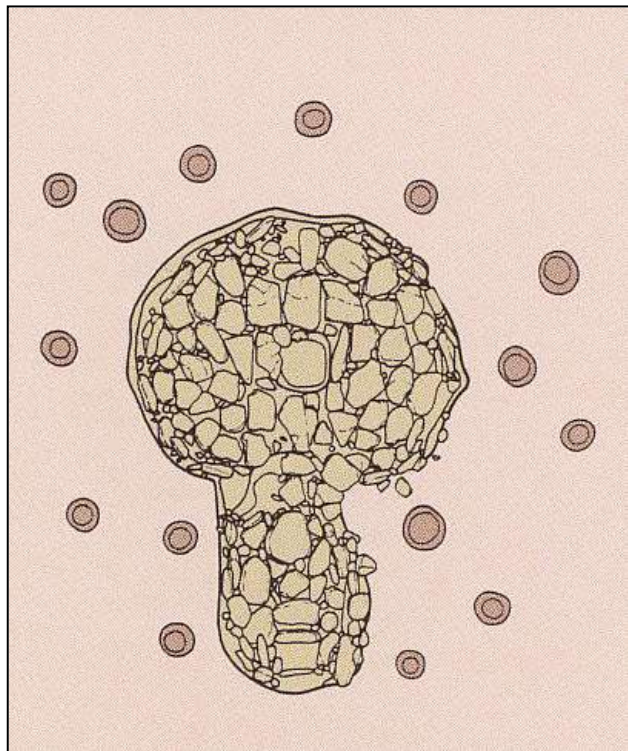
川尻中村遺跡・原東遺跡の調査成果から、縄文時代中期中葉期(勝坂式)から中期後半期(加曽利E式・曽利式)にかけて、ほぼ同時期に営まれた集落であると言える。両遺跡とも住居跡が円形に配置された環状集落であり、特に川尻中村遺跡では、住居群の内側に列石や土坑墓群を有し、集落の構造が具体的に捉えられた良好な事例である。両遺跡からは、土器・土製品 17 万点(約 6 トン)、石器・石製品 2 万点(約 6 トン)、礫 3 万点(約 32 トン)と極めて豊富な量の出土遺物が出土している。縄文時代中期後半期の土器を見ると、関東平野に主体的な分布の「加曽利E式土器」と中部高地に主体的な「曽利式土器」の両者が混在している。石器や石製品の石材では、相模川で産出する凝灰岩などが主体であるが、多摩



第3図 復元住居 (戸沢 1994 より)



第5図 復元住居(秋田 1991 より)



第4図 川尻中村遺跡 第98号住居跡 天野 2000「川尻中村遺跡・原東遺跡 図録」 敷石部分の外側に柱穴が15箇所発見されています。本来の上屋構造は、敷石部分よりも大きいことが考えられます。

川流域のチャートや荒川流域の滑石、信州産や神津島産の黒曜石、糸魚川産の翡翠などが出土している。石器や石製品の石材は、その特徴を生かして製作され、剥離が容易なホルンフェルスは打製石斧、耐久性の強い凝灰岩は磨製石斧、緻密な剥離が可能な黒曜石やチャートは石鏃、表面が粗い玄武岩や安山岩は石皿などに用いられている。土器や石器などから、各地域との盛んな交流が裏付けられる。

3. 発見された住居跡群

川尻中村遺跡では、竪穴住居跡 91 基・竪穴状遺構 1 基・列石 1 基・集石 10 基・焼土跡 3 基・埋設土器 10 基・土坑 310 基・ピット 854 基が発見されている。住居の大部分は台地平坦面に径約 100mの円を描くよう配置された、環状集落と呼ばれる集落構造を呈している。住居跡群の内側には列石と呼ばれる河原石を組んだ配石が巡り、その内側には墓と考えられる副葬品の土器や石を伴った土坑群が形成されている。そのさらに内側にあたる集落の中央部には、掘り込みのある遺構は発見されないことから、広場のような空間であった事が考えられる。原東遺跡でも、24 基の竪穴住居跡が発見され、円を描くよう配置されている。両遺跡で発見された住居の時期は中期後半期の加曽利 E 2 ～ E 3 式期が主体であ



写真1 第4号住居跡



写真2 第6号・第16号住居跡



写真3 第91号住居跡 炉



写真4 第15号住居跡 炉



写真5 第95号住居跡 埋甕



写真6 第45号住居跡 埋甕

柄鏡形住居の復元例では、住居の外縁は柄鏡形ではないと想定される事例もある。竪穴住居の大きさは、4m～最大7.8mで、円形・楕円形・隅丸方形などの形態がみられる。主柱穴は4本～6本で、なかには7本以上のものも存在する。炉は、住居の中心から壁に寄ってつくられ、壁の際には周溝が巡る。周溝は同心円状に複数認められるものもある。住居の炉と中心を結ぶ中軸線上には、埋甕が存在する場合が多く、出入り口と考えられている。この部分が重要で、加曽利E3式期の段階で周溝が埋甕を囲むよう僅かに突出するようものがあり、柄鏡形住居の張り出し部出現段階のものと考えられる。炉は、扁平で細長い石を円形や長方形などに組んだ石囲い炉が多く、石材の豊富な相模川が背景にあること



写真7 環状列石



写真8 第121号土坑



写真9 第167号土坑



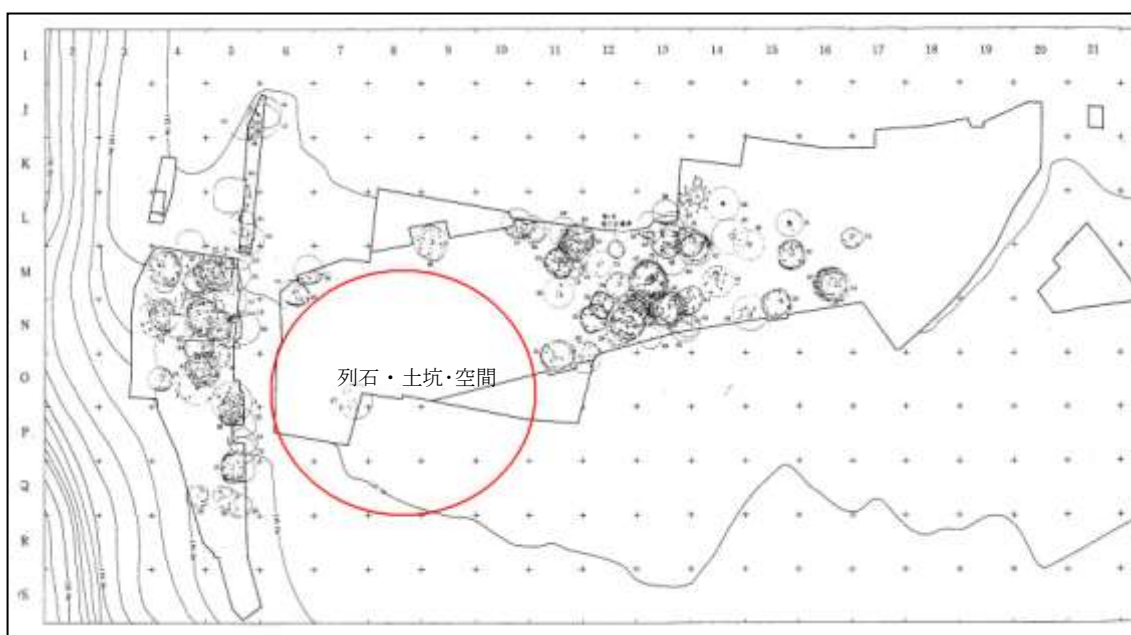
写真10 第121号土坑

が理由にある。形態は、地面を掘り込んだのみの地床炉のほか、四角形・五角形・配石炉・石囲い埋め甕炉・石囲い集石炉など多様性が特筆される。

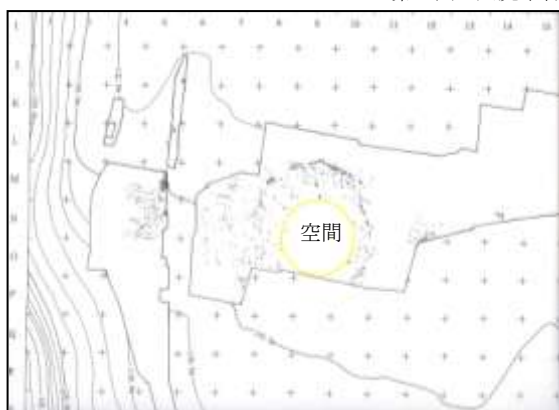
列石は、住居群の内側につくられ、土坑群を取り囲むよう弧状に位置していることから、墓域を区画しているものと考えられる。配石は、川原石が組まれた状態のものが単独で位置しているもので、川尻中村遺跡では、土坑は、約300基発見され、用途も多様であると思われるが、その多くは、集落の中央部にまとまっている。大きさは径1m前後の規模が多く、長方形・楕円形・円形など様々な形態がある。位置関係では、近接するものや一部重なりながら複数が重複するものなどがあり、場所の制約が考えられる。墓標のように石柱が直立しているもの、土器が伏せられた状態のものなどがあり、副葬品と思われる小形の土器や耳飾りなどが出土していることからその多くは墓であったと考えられる。

4. 中期集落の様相

神奈川県内で発見された中期後半期加曽利E式期の竪穴住居跡数は187遺跡・3035基を数え、縄文時代中期は、集落が最も発達した時期にあたる。中期初頭の五領ヶ台式期の遺跡数は129遺跡(住居跡55基)、中期中葉勝坂式期の遺跡数は、153遺跡(住居跡1439基)、称名寺式期の遺跡数は37遺跡(84基)と中期後半段階でそのピークを迎えているといえよ



第6図 川尻中村遺跡 住居跡分布図

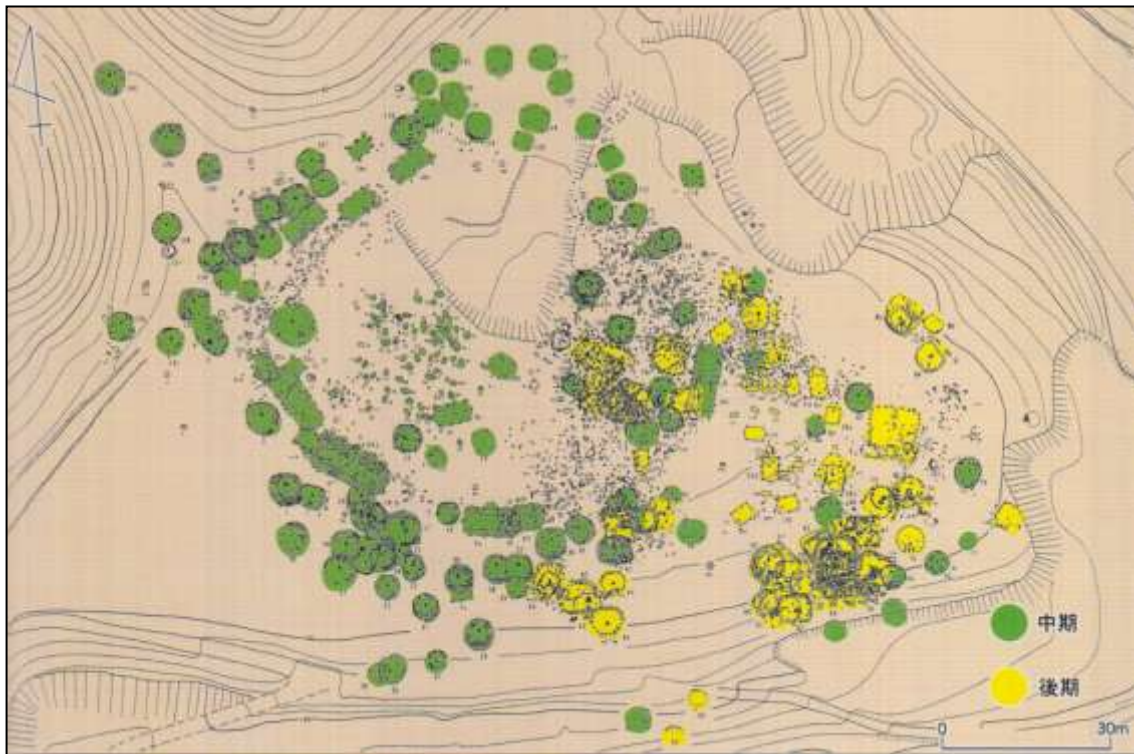


第7図 川尻中村遺跡 列石分布図



第8図 川尻中村遺跡 土坑分布図

う。川尻中村遺跡では、竪穴住居 91 基が発見され、環状集落を呈している。住居の時期は、勝坂式期 11 基、出土遺物が少ないこと、全体の把握が困難なことなどから帰属時期の把握が困難であるものは 28 基で、その他の 52 基は中期後半段階の所産である。帰属時期が不明のものの多くは、形態や分布などから推定すると、ほとんどは中期後半段階と考えられ、現状では 80 基近く、調査区外に展開しているものも含めると、約 160 基程度の規模を持つ集落であったと推察できる。勝坂式期住居は、一部例外も認められるが、原則として 10～20m 程度の距離を空けて点在する傾向が認められる。また加曽利 E 式期と同様に中央部には住居構築されない空間が存在する。加曽利 E 式期では、環状集落中央部に径 50m 程度の空間があり、その外側に約 50m の帯状を呈するよう住居群が密に取り巻いている。住居の平面的な分布を見ると、①複数の住居が著しく重複する住居群、②かなり近接しているが、他の住居と重複しない住居群、③集落のまとまりから 90m 以上離れて点在するよう分布する住居が認められる。住居群の内側には土坑群が構築され、住居群の内側に収まるよう径 30m 程度の円を描くよう環状に分布する。これら土坑群は均一的に分布するのではなく、



第9図 横浜市都築区 神隠丸山遺跡の縄文時代遺構（横浜市歴史博物館 2000 より）

南東部及びその対角線上にあたる北西部に著しく重複して集中する傾向が認められる。

さらに住居群と土坑群の境界を示すよう列石が配置されていることも、本遺跡最大の特徴となっている。集落構造を把握する上では、前段階の勝坂式期のあり方が重要で、継続するよう占地しているが、住居の密度の差異は大きい。また中期終末期の加曽利E 4式段階では、集落の規模が極端に縮小していく傾向が明瞭で、後続する後期の様相を把握した上で検討していく必要がある。視点を広げると、近隣の原東遺跡や川尻遺跡との関連も密接であることが十分に考えられ、さらには相模川流域に所在する当該期の集落とも相互の深い関係が想定できる。

引用・参考文献

戸沢充則 1994『縄文時代研究辞典』

天野賢一 2000『川尻中村遺跡・原東遺跡 図録』

秋田かな子 1991「柄鏡形住居研究の視点」『東海大学校地内遺跡調査団報告』2

横浜市歴史博物館 2000『発見 巨大集落—大熊仲町遺跡と縄文中期の世界』



表紙写真：川尻中村遺跡の縄文時代集落

裏表紙写真：川尻中村遺跡・原東遺跡から出土した土器・土製品

公益財団法人かながわ考古学財団 平成 25 年度考古学特別研究講座
—報告書の成果から導き出されるもの②—



縄文中期の環状集落

—相模川流域の縄文時代—

発行日 2014(平成 26)年 9 月 13 日

発 行 公益財団法人かながわ考古学財団

〒 232-0033 神奈川県横浜市南区中村町 3-191-1

TEL 045-252-8689 FAX 045-261-8162

e-mail : kaf@kaf.or.jp